

鳥取市が運営する「ふれあい動物公園」リニューアル計画が着手された。昨秋、余剰と見なされたサルが動物取扱業者に払い下げられようとした。兵庫県のこの業者は、劣悪な飼育状況を、動物愛護団体に繰り返し告発された結果、サルを含む危険動物の取扱登録申請を出さなくなったが、仲介業は可能である。鳥取市は最終的な引き受け先を確保せずサルを渡そうとしていた。

問い合わせてもらうと、サルの行く先はX県Q動物園で、日本動物福祉協会阪神支部に知らせたところ、すぐに資料が送られてきた。水槽のな

い狭いコンクリート床に横たわるカバ、姿勢を変えられないヤギ。査察は八月、当日の気温は三十八度を超え、動物たちの汚れた水差しは空だった。

余剰動物の行く末は…

4日、鳥取でシンポ

サルは、鳥取市に限りならず、国内の動物園は運営方針が余剰動物を生む構造をはら

みで動物園が成り立つから、業者はいつでもいくらでも無料で動物たちを調達できる。コストのかかる生き物としてではなく、消耗品扱いで引き受ける。収容動物の福祉を犠牲にしないで、展示動物が商売として成り立つものかどうか疑問だし、業者間で再譲渡が繰り返されることも少なくない。多くは闇の中だ。

動物愛護法改正後、基準の見直しが行われてきたが、「展示動物に関する基準」も改正された。基本コンセプトは個人飼いに主とするもの。本質的には変わらない。適正な管理、適正な飼育、終生飼育の原則にのっとりて運営されているか。持て余される動物が人為的に生み出される構造は、動物園だけでなく、個人飼い主、ブリーダー、遺棄動物の保護施設等にも共通していて、悪循環の連鎖の中で動物たちはどういった処遇を受け消えていくのか？

十二月四日、四人の講師を招いてシンポジウム「余剰動物の行く末」が開かれる。多くの市民の参加を望みたい。

(鳥取共生動物連絡協議会主宰、仲市素子)

◇シンポジウム「余剰動物の行く末」は12月4日午後1時半から、鳥取市富安2丁目のさくら会館2階アクティブと

とりで。問い合わせは電話080(1926)1895、仲市さんへ。